



熱い・厚い・有難い 南小サポーターさん

火曜日のCS研修、ありがとうございました。私たち教員という仕事は、子どもたちや地域社会の「未来を創る」ことに関わらせていただいているという責任の大きさと尊さを改めて感じる時間となりました。

私たち教員、さらには学校の「サポーター」として厚く支えてくださる方がおられることに、感謝ですね。今回をきっかけに、さらに子どもたちや地域の「未来」について考えていきたいですね。



てらす・とばす・ひらく

大きな行事である運動会が、終わりました。運動会がゴールではなく、この先の成長にどうつなげていくか、とっても大切だと思います。学校現場では、「6月危機」などの言葉を聞くこともあります。未然に防ぐ、いや運動会を通して高まった子どもたちをさらにどう高めていくかという視点が、大切なのではないのでしょうか。

大屋学級を覗くと、「節目をつくる」と黒板に書かれていました。火曜日、活動的に取り組んできた運動会を、静観的・俯瞰的に捉え直し、次に進む目標を考えていました。こうして「ふりかえる」ことで、自分の成長に気付いたり、新たな課題を見つけたりすることにつながっていました。まさに、「ふりかえり」を行う意味がここにあると思います。言語化しなければ、自覚しにくいことです。そして、旬を逃さない。

さらに「すごいなあ」と学んだのは、「成長したこと」という項目で鉛筆が止まっている子がいました。「はやく書きなさい」ではなく、「〇〇くん、こんな成長もしたじゃん」などと声をかけておられました。するとその子は、どこか嬉しそうな表情に。これが、「評言」ですよ。自分では気づかない（もしかしたら気付いていたけど教師に認めてもらいたかったのかも）ことを、教師が代わりに認めることで「ぼくは、運動会で〇〇な成長をした」とメタ認知することにつながりますよね。こうして自分の成長を自覚することで、「もっと」や「この成長を止めるのではなく、次は〇〇ができるようになりたい」というように、成長を加速させていくことにつながるのだと思います。

きっと大屋先生が、「節目をつくる」として仕掛けなかったら、子どもたちだけで成長に気付いたり、次の目標を見つけたりするのは難しかったと思います。教師の大切な役割を、大屋先生から学びました。

